

『愛と憎しみの韓国語』（辛淑玉、2002）を読んで

パウロ 眞野玄範

著者の辛淑玉氏は、渋谷生まれの在日コリアン三世で(1959-)、日韓のビジネス関係に関わる人材育成の会社等を主宰する実業家であり、また人権活動家である。さらっとまとめられている本書だが、そうした来歴がよく反映され、単なる豆知識の寄せ集めにはなっていないため、いろいろと考えさせられるところが多かった。

例えば、本書 p.191 で「パンチョッパリ」（半日本人）という言葉が取り上げられ、「在日を最も侮蔑した言葉。在日の間でも、韓国でも投げかけられる、排除のもっとも激しい言葉の一つ」と書かれている。この短いコメントには、本書には書かれていないのだが、辛淑玉氏が、子どものとき、朝鮮学校に転校したときに「パンチョッパリ」と呼ばれ、「総括」の場で「思想が悪い」と「自己批判」させられた経験が背景にあるのである。

以下、辛淑玉氏の、(1)在日としての視角と、(2)フェミニストとしての視角の、各々から書かれている部分で印象的な箇所を挙げる。

なお、日韓のビジネス関係に関わる人材育成会社をやっている経験からのコメントも面白く、実際的な知恵、見方として、特に以下の箇所が参考になると思った：「父なる首領様」（p.87-89）、「韓国はおごりの文化」（p.30-31）、食事の作法の違い（p.229-234）。また、比較文化論も面白かった：「“私”を指す言葉」（p.17-18）、「日本の悪口・韓国のヨッソル」（p.67-71）、「顔」に対する日韓比較」（p.193-196）。

(1) 在日としての視角

辛淑玉氏は、本名の他に創氏改名時代の氏を用いた日本名の新山節子を持つ。「せっちゃん」の愛称で呼ばれて育ったという。1987年に帰化申請をした際、「辛淑玉」の名義をそのまま使いたいと申し出たところ、「もっと日本人らしい名前にしろ」と言われ、日本語読みに変えてもいいと譲歩しても、「あなたには、よき日本人になろうという意思が感じられない」と言われて却下されたという。

本書では、こうした在日としての生い立ち自体については、あまり多くは語られていないのだが、やはり、この視角から書かれている箇所が最も胸に響いてくる。

○ 被差別者でありながら差別者の視点を内面化していた祖父や叔父たちの姿に対して感じていた哀しみ（p.72）。

辛淑玉氏の祖父は、日本で生まれ育って日本語しか話せないのに、祖母をなじるときだけ朝鮮語だったと書かれているが、これに似た話を在日の友人から聞いたことを思い出した。子どもには、朝鮮語が、そのような場面での、そのような罵りに使う言葉としてばかり印象づけられるわけで、差別者の視点を再認し、自己卑下意識を持つことにもなりかねない。

「差別」とは、差別者による排除、直接的な暴力だけでなく、こうして日常生活の中で自己肯定感や民族意識と関わって人に深い傷を負わせるものなのだと考えさせられる。

○ もうひとつ心に残ったのが、韓国に渡った在日のプロ野球選手について書かれた箇所だった (p.223)。

その技術で球界を驚かせながらも、「悪役」として位置づけられ、「言葉ができない」「チームに溶け込まない」と心ない非難を受けた人が多いという。

「同朋先輩の気持ちを考えると、韓国語ができない在日をなじる韓国人をはたき倒したい気持ちになる。学べる環境などなかった。それ以前に、自分とは何かさえ見えない状態だったのだ。多くの韓国人は在日の歴史になど興味もないし、まったく知らない。そして、傷つけられた民族的優越感を、言葉ができない在日に向けるのだ。」

ストレートな言葉が、日本と韓国の間で宙づりになった在日の姿を浮き上がらせている。

○ 本書が「在日の焼き肉レストラン」と「モランボンのジャン」というふたつのエピソードで結ばれていることも、印象的であった。どちらも良心的な日本人を登場させているのだが、それは配慮というよりも、メッセージとしてであろう。

モランボンのCMに出演した俳優の米倉斉加年さんは、その後、仕事が激減し、娘は学校で「チョーセンジン」と言われていじめられ、実は在日だったのかという陰口をたたかれるようになったとのこと。しかし、米倉さんは、そうなることを覚悟してCMへの出演を引き受けたのであり、その後も毅然とした態度を貫いたのだという。

「体が凍った。“朝鮮”という言葉が、テレビから流れてきたのだ。しかも、民族衣装で。焼き肉のタレのCMだったが、私には、“朝鮮人でもいいんだよ”“朝鮮人でも殺されないんだよ”と語っているように聞こえた。私にとってこのCMは間違いなく、文化の解放だった。」

この言葉に打たれた。辛淑玉氏と自分は十歳しか違わない。同じ時代、同じ社会に生きてきたはずなのに、モランボンのCMをこうして受け止めた人たちがいることを全く想像できていなかった。自分は本当に分かっていない、と思わざるを得ない。

○ 本書の最後に、「チマ・チョゴリを着なくてはならないという時代を、良心ある日本人とともに見事に乗り越えたのだ」とある。

本書が出版された2002年5月の空気について考えさせられる。韓国では太陽政策がとられ、在日の間でも京義線と東海線の連結に関わる象徴的な連帯アクションが呼びかけられるなど、時代の曲がり角を越えた感覚があったかもしれない。しかし、2002年9月を境に日本の政治に大きな影響を持つようになった北朝鮮制裁論、今年になって激しさを増している在日の参政権をめぐる排斥運動、そして北朝鮮と韓国の冷めた関係などによって、このわずか数年前の空気を思い起こすことさえ難しくなっていることに改めて愕然とさせられる。

(2) フェミニストとしての視角

○「チョッパリ」

日本人を侮蔑する言葉として「チョッパリ」が紹介されているが (p.73)、その中で、辛淑玉氏のフェミニストとしての感性を見ることができた。「チョッパリ」とは、偶蹄目の牛・豚のようにひづめが二つに割れた足を指し、下駄を履く足、または足袋が似ていることから、日本人への揶揄として定着したものだという。

辛淑玉氏は、そこで筆を止めない。

「しかし、チョッパリは無くさなくてはならない差別語である。その言葉の意味するものはこうだ。日本では、かつて、いとこ同士が結婚したり兄嫁が兄の他界後、弟と再婚することがあった。これは、韓国の価値観の中では人倫にもとるものとされている。つまり、動物と一緒にだから、その足は、けもの足と一緒にチョッパリとなる。」

在日としての視点に加えてフェミニストとしての視点を持っているからこそそのコメントであろう。

○「アジュンマ」

「アジュンマ」(p.111) へのコメントにも、辛淑玉氏のフェミニストとしての感性が表れていて胸を打たれた。

「私は、周囲から“品がない”と言われる高齢の女性を見ると胸が詰まる。在日社会でも根性が悪く意地悪な婆さんたちがたくさんいた (今もいる)。子どもの頃、祖母の家に来て物を盗っていく在日のおばあちゃんがいた。(…) その時の私は、そのおばあちゃんが嫌いで、クソババアと思っていた (…) 今、大人になって、彼女たちが生き抜いてきた時代の過酷さを知ると、胸がかきむしられる思いがする。根性悪だったおばあちゃんの姿を思い出すたびに涙が出る。苦勞すると人間ができるなどというのは、まれなことだろう。むしろ、苦勞をしたからこそ、根性も人との距離感もひん曲がるのだ。そうしなければ生きていくことはできなかったと思う。虐げられた者が美しいというのは、虐げる側の願望でしかない。だから、韓国でアジュンマたちのすごい生命力を見せつけられると、人間のたくましさや強さと同時に、そうならざるを得なかった抑圧の強さを感じてしまう。」

「虐げられた者が美しいというのは、虐げる側の願望でしかない」という指摘は、特に心に留めなければならぬと思わされた。

○ 子どもや孫の名前からスタートする女性の呼び方

授業でも説明があったが、親族名称の複雑さ (p.45) には驚かされると同時に、こうして言葉の体系にまで確固とした社会構成原理となっている家父長制は、今後はどうなるのだろうかと思わされた。

韓国のドラマを見ていて「～のオンマだよ」という言い方に気がついてしたが、日本でも時たま聞かれる同様な言い方と同じ程度の表現なのだろうと思っていた。そうではなく、それが女性に対する標準的な呼び方になっていると知って (p.116-117)、韓国の家意識の強さの印象を改めて深くした。

○「家」意識

本書では各所で儒教文化、特にその家意識の実際の現れについて書かれていて、興味深かった。考えてみると、自分は儒教についてほとんど何も知らない。宗教というよりも道徳論、身分制度や長幼の序のことという感じであって、また専ら武士階級の文化だったという理解であったかもしれない。

そのため本書で儒教が根本において宗教であることを知って (p.56-58、p.137-140)、なるほどと思わされた。

「儒教の“儒”とは、もともとはこの招魂再生イベントの主催・進行役であるシャーマン（祭司）のことだった。国家の祭司は皇帝であり、家庭の祭司は父親なのである。だから、どの家でも父がいないとチェサは始まらない。チェサは、父親が死ねばその息子に、息子が死ねば男の孫に、と受け継がれていく。これを確実に継承していくためには“一族”が必要となる。おのずと、女は一族に男子を供給するために“子どもを産むこと”“産み続けること”が最大にして不可欠の仕事となる。…」

韓国も北朝鮮も、天皇制の日本も、その現れ方に表面的な違いはあっても、実に中世的な儒教国家であるという辛淑玉氏の指摘は腑に落ちる。

日本で「神道」として知られているものの祖霊崇拜は実は儒教に由来する部分が大いのではないかと (p.58)、また仏教の伝統として見られている先祖供養も儒教に影響を受けて形成された部分が大いのではないかと (p.57)、今更ながら気づかされた。その視点を得ると、日本でも、単なる武士階級の文化というよりも、もっと広範に民衆の文化の中に、儒教的なものが息づいていることが見えてくる。

この点で本書で辛淑玉氏が指摘していることとして「内と外の意識」がある。私は日本で顕著なこの意識を、都会と農村との人間関係の違いという文脈、近代化の過程で反動として形成されたナショナリズムという文脈、あるいは古くは朝廷と「まつわろぬ人々（体制外の者たち）」の関係の文脈などで捉えていたように思うが、確かに、これは農村に残る前近代的文化の遺制というより、第一義的には家父長制的家意識の問題であると思わされた。夫が妻に言う「出て行け」「荷物をまとめろ」等々の言葉と、日本人が外国籍住民に言う「帰れ」という言葉に通底するものがあると辛淑玉氏が指摘していることについて自分は考えたことがなかったかもしれないと気づかされたのである。

辛淑玉氏が韓国における国家と政党の関係を儒教的父子関係において見ている点も興味深かった (p.89-92)。

また、企業文化における儒教的関係の現れが韓国と日本で不思議なほどに異なることにも気づかされて、その点も興味深く思われた。同じ儒教的意識が働いても、日本では、労使や親会社と子会社等の関係が儒教的父子関係で結ばれて短期的な利害を超えた保護・従属の関係が作られているわけだが、韓国では「親父・社長・長男」の権威に従う関係だけで (p.87-89)、転職が多いという (p.91-93)。

この家父長的権威の意識という文脈で書かれているキム・デジュン大統領の演説の箇所も興味深く思った (p.97-98)。「…日本には、過去を直視し歴史を恐れる、真の勇気が必要であり、韓国は、日本の変化した姿を正しく評価しながら、未来の可能性に対する希望を見いだす必要があります」といった演説だが、これに対して韓国では「優秀な俺が韓国民を指導するのだ」という風を感じた人が少なくなかったということである。日本では弱くなっているエリートの責任意識が、家父長的権威の文化の中で、まだよく保たれているということなのだろう。辛淑玉氏が紹介している反発は、元々その文化の中に織り込まれているものなのだろうか。それとも、その文化が変化してきている徴候なのだろうか。

なお、韓国の中でも慶尚北道が最も家父長制意識が強く残っていること、そして韓国でも日本でも近代化の過程のある段階で権力が家父長制意識の強い地域、すなわち慶尚北道と山口県の男たちに握られていたことの指摘があつて、興味深く思った。

また、儒教的な家父長制意識について、在日の男の方が韓国の男よりもまし、韓国の男の方が中国の朝鮮族の男よりもまし、朝鮮族の男の方が北朝鮮の男よりもましと、笑い話のようにして書かれているが (p.49-50)、現代の中国の朝鮮族が中国人一般と同様なジェンダー観を持っているとしたら、朝鮮族は北東アジアで最も家父長制的ジェンダー意識から遠いのではないかと疑問を持ったが、どうであろうか。



ところで、本書の脈絡からは外れるが、「韓国に行くと男も女もすごくヤキモチ焼きだなあと感じることが多い。私は儒教の影響が大きいと思う。儒教では“契りを結んだら守り抜く”というのが鉄則だ」(p.12)と書かれているのを読んで、旧約聖書の神と人の関係を連想してしまった。実感として、日本人では一般に、すくなくとも自分は、「契約」に対する感覚が弱いように思う。儒教的な「契り」の感覚は、聖書的な契約関係への感性に通ずるものがあるのだろうか。それとも似て非なるものなのだろうか？